

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

シマイサキ

Rhynchopelates oxyrhynchus

シマイサキは、本州中部より南と、国外では台湾、フィリピンなどに分布しています。体にある数本の黒い縦縞が特徴で、この内の1本は、上唇から目を通して、尾びれまで達し、名前の由来となっています。近縁のコトヒキに似ていますが、シマイサキの縦縞が真っ直ぐであるのに対して、コトヒキは縦縞が曲がっていることで、簡単に見分けることができます。



下流域で釣ってみよう！
塩焼きにすると
淀川の味が楽しめる



沿岸の浅い岩礁域や川の河口、汽水域などに生息しています。淀川では、淀川大堰から下流の汽水域に、初夏～初秋の頃、幼魚が数匹の小さな群れになっているのがよくみられます。産卵期は6～8月頃で、小魚や小型の甲殻類などのほか、藻類なども食べます。シマイサキ科の魚は、浮袋に特別な発音筋があるため、釣り上げた時などに「グググ」と大きな音を出すことがあります。塩焼きや煮付けなどにして食べられ、美味しい魚ですが、市場に流通されることは少ないようです。縞模様がとても美しく、鑑賞用にもなりますが、あまり飼育されることは少ないようです。

under the water

the waterside

花想鳥感

四季折々、
水辺の生物多様性

芥川緑地資料館 主任学芸員
高田 みちよ

センダン林

淀川に芥川が注ぎ込む「唐崎」という地先に行かれたことはありますか？ 河川敷なのに立派な林があります。この林の大部分は「センダン」という木です。「センダンは双葉より芳し」という言葉がありますが、この言葉のセンダンは「ジャクダン」のことで、淀川に生えるセンダンは芳しくはありません。5月頃には白と紫の可憐な花を咲かせ、この花は弱いながらも良い香りがします。

なぜ、この木が淀川で林を形成しているのでしょうか。重要な要因は、淀川の水位の変化が少ないということです。淀川の上流には天ヶ瀬ダム、下流には淀川大堰があり、流量調整をしています。2013年9月の台風18号では淀川の水位が上がり、大きなニュースになりましたが、そんなことはめったにありません。水位調整のある淀川では、年中およそ同じ水位で、ほんの時々上がる程度。たまに水位が上がっても勢いがないので、流れの両側にある高水敷に乗った水は土砂を削るのではなく落としていき、高水敷はますます土砂が堆積していきます。堆積した土砂に草が生え、腐葉土ができ、鳥が落とした木の実が芽を出して生長してできたのが今の林です。この林には、カブトムシやキツツキが見られることもあります。水位調整の副作用として川岸にできた林に、森林の生物が生息するのは「不自



淀川の唐崎地区にある
立派なセンダンの林



然」なこと。川原が川原らしくあるように、淀川河川事務所では木を伐採したり、高くなりすぎた川岸を削るなど、本来の川原に戻す試みを行っています。

the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

ヒメタニシ

淀川ではヒメタニシ、オオタニシ、マルタニシの3種の在来タニシが生息しています。中でも、今回ご紹介するヒメタニシは淀川下流域では、ごく普通に見ることができます。本種は、殻高約3.5cm程度、殻表は緑褐色（蓋は赤褐色）の巻貝です。螺肋（らろく：巻貝の巻きに沿って発達する突起）が強く出て角張り、殻皮毛があります。

ヒメタニシは水田、池沼、用水路などタニシ類の中では最も多様な環境に生息し、水質汚濁にも強いとされています。淀川では流れのないワンド等の水深が浅いところに多く、礫、ヨシの茎や杭、カナダモなどの水草、ゴミなどに付着しているほか、砂泥～泥底にも生息しています。雑食性で付着している微小藻類やデトリタス（生き物等の死骸）などを摂餌して成長していきます。卵胎生で、6～8月頃、水中に約30～40個の稚貝を放出します。ヒメタニシが目されることはほとんどないと思いますが、水質汚濁にも強く、飼育水槽では水槽の掃除屋として大活躍してくれます。淀川ではたくさん生息していますので、淀川に行かれた際は、ぜひ浅場のヨシ茎や水草、川底を観察してみてください！



写真（上）
城北ワンドでの生息の様子
写真（右）
水中で岩に付着している姿



the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100

カダヤシ科 カダヤシ
Gambusia affinis

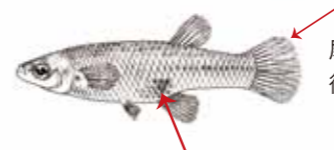
淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



●オス
繁殖期に尻ビレが交尾器になる



尾ビレの
後縁が丸い



●メス
繁殖中、腹部に黒点が出る

AN INVADER

蚊を絶やすために、蚊の幼虫であるボウフラを駆除する目的で日本に輸入された魚である。原産地は北アメリカで、全長はオスで3cm、メスで5cmほど。自種を含め、口に入る小さな生物は何でも食べてしまう。水田や用水路、流れの緩やかな河川に生息。水質汚濁にも強い。メダカによく似ているが、尾ビレと尻ビレの形が大きく異なることで見分けられる。卵胎生で、産卵に特別な環境を必要としないため、繁殖力がとにかく強い。一方、メダカは卵を水草に産みつける。カダヤシはメダカの卵や仔魚を捕食するなど、メダカと競合するが、メダカが駆逐されることがほとんどだ。そうなる前にカダヤシに捕獲圧をかける必要がある。



写真（上）オス
写真提供 / 小村一也
写真（下）メス
写真提供 / 川島大助

